

『伊勢物語』第四十五段考：その〈原形〉に関する 億説

後藤，康文
北海道大学大学院教授

<https://doi.org/10.15017/10291>

出版情報：語文研究. 103, pp.10-18, 2007-06-01. 九州大学国語国文学会
バージョン：
権利関係：



『伊勢物語』第四十五段考

—その 原形 に関する臆説—

これは、もとよりどこにも証拠のない話である。しかしながら、一案として提起しておく意義はあるものと考え、あえて筆を執ることにした。

—

「こついつ一段を読んでいますと、何かレクイエム的な、—もの憂いような、それでいて何となく心をしめつけてくるようなものでいつか胸は一ぱいになって居ります」という堀辰雄の批評(注1)があまりにも有名な、『伊勢物語』(天福本)第四十五段。それは、次のような章段である。(注2)

昔、男ありけり。人のむすめのかしづく、「いかでこの男にものいはむ」と思ひけり。うちいでむことかたくや

後 藤 康 文

ありけむ、もの病みになりて、死ぬべき時に、「かくこそ思ひしか」といひけるを、親聞きつけて、泣く泣く告げたりければ、まどひ来たりけれど、死にければ、つれづれとこもりをりけり。時は水無月のつこもり、いと暑きころほひに、宵はあそびをりて、夜更けて、やや涼しき風吹きけり。螢高く飛びあがる。この男、見臥せりて、ゆく螢雲の上まで往ぬべくは秋風吹くと雁に告げこそ

暮れがたき夏の日暮らしながらむればそのこととなくものぞかなしき

この章段に関するもつとも疑問視されるべきは、その本文形態の特殊さであり、古来、

通常一首であるはずの「男」の詠歌が、例外的に二首並

列されている点。

二首目の「暮れがたき」歌の方が、時間の上で、一首目の「ゆく螢」歌に先行している点。

の二点が問題にされてきた。塗籠本創作者が、一首目の歌と密着した本段地の文後半部分の体裁を整えて、まずは「ゆく螢」の一段（第四十三段）として独立させ、つづけて、残る二首目の歌と本段地の文前半部分とを結びつけ、「暮れがたき」の一段（第四十四段）に改造したのも、このような不審を解消するための営為であったと思われる（本稿第四節参照）。

ことほどさように、特殊、否、異様な形態。——第一点について付言すれば、二首並列という形式自体が他に例を見ないのみならず、この両歌には、ことさら併置されねばならぬ内的理由が認められないのである。また、第一点の焦点「暮れがたき」歌は、『肖聞抄』が「前の哥とおなじ時にはよまざる哥とみゆ」といい、『關疑抄』が「此哥は、この夜よみたるとは見えず。前後はしらず、いみにこもりてひるつかたなどよみたる哥なるべし」というように、少なくとも現在の位置に据えられるべき歌でないこと明白なのである。

となれば、道はひとつしかないだろう。すなわち、本文の変成を疑うよりほかに手立てはないのだ。不自然な形に変わってしまった第四十五段を、これまでやむなく享受しつつけて

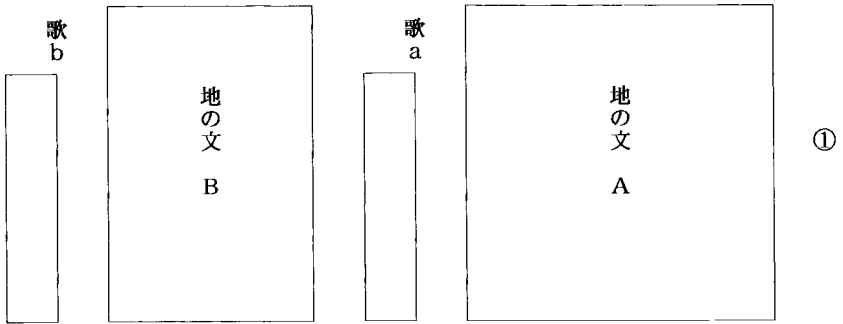
きたとするなら、今なすべきは、いつまでもなくその復元と
いうことになってこよう。

二

そこで、いかなる変成過程を考えるべきか、であるが、結論を述べるならば、次頁の図に示したような推定が、もっとも理に適っているのではないかと思う。すなわち、

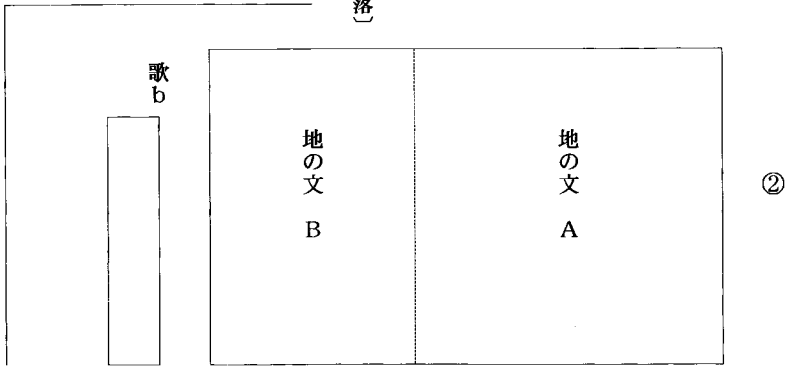
本章段の 原形 段階では、定家本をはじめとする現存諸本のほとんどにおいてひとつづきになっている地の文の間に、歌 a（「暮れがたき」歌）が置かれていた。その位置は、時間の流れからして、「こもりをりけり」と「時は水無月のつこもり」の狭間であったと考えられる。本章段の 原形 成立からそれほど隔たらない平安期のある書写段階において、何らかの事情に因って歌 b が脱落し、地の文 A と B とが結合してしまった。その結果、本章段は一時的に歌 b（「ゆく螢」歌）一首のみをもつ章段に変貌したが、抜け落ちた歌 a は、細字による傍記や注記の体裁をとって余白のどこかに生き残ったものと考えられる。

本章段の過渡的本文に痕跡をとどめていた歌 a を、後の

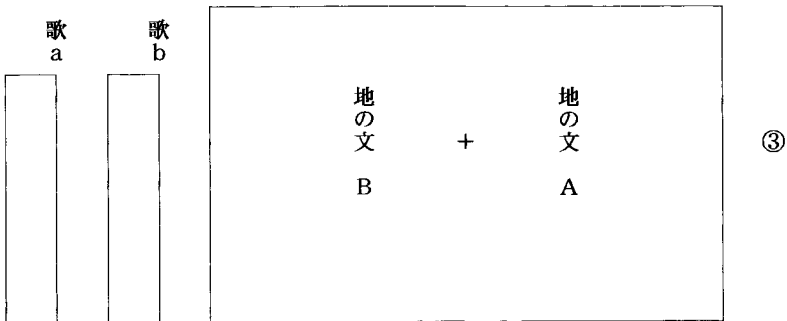


↓

〔脱落〕



↓
〔復活〕



書写者が誤った位置、つまり、歌bのあとに並列するかたちで復活させたために、今日に伝わる不審な章段形態が成立した。そして、この本文変成は、遅くとも平安後期頃にはすでに完了していたものと考えられる。

以上の推定が大筋において正しいとすれば、第四十五段(天福本)の本文は、次のような形に組み直しを迫られることになる。

昔、男ありけり。人のむすめのかしづく、「いかでこの男にもいはむ」と思ひけり。うちいでむことかたくやありけむ、もの病みになりて、死ぬべき時に、「かくこそ思ひしか」といひけるを、親聞きつけて、泣く泣く告げたりければ、まどひ来たりけれど、死にければ、つれづれともりをりけり。

暮れがたき夏の日暮らしながむればそのこととなくものぞかなしき

時は水無月のつこもり、いと暑きころほひに、宵はあそびをりて、夜更けて、やや涼しき風吹きけり。螢高く飛びあがる。この男、見臥せりて、

ゆく螢雲の上まで往ぬべくは秋風吹くと雁に告げさせ

「男」は、自分を思ってくれていた見えず知らずの娘の死穢

に触れ、籠居を余儀なくされた。じりじりとした所在無さの中で晩夏の一日を過ごし、おのずから湧き起こってきた感懐を、その日暮れ時に形象化したのが「暮れがたき」の一首であった。そして深夜、秋の到来を予感させる風が吹いた折しも、亡き娘の魂かと思まがう螢が高く飛び上がったのを見て、「男」はさらに、「ゆく螢」の歌を口ずさまないではいられなかった、というわけである。

三

さて、二点ほど補強しておきたい。ひとつは、『伊勢物語』(天福本)において歌が詠まれた時節を指定する場合の地の文のパターンの問題であって、これには、

(上略) いかと思ひけむ、時は弥生のついたち、雨そほ降るにやりける。

起きもせず寝もせて夜を明かしては春のものとながめ暮らしつ (第二段)

(上略) 富士の山を見れば、五月のつこもりに、雪いと白う降りり。

時知らぬ山は富士の嶺いつとてか鹿の子まだらに雪の降るらむ (下略) (第九段)

(上略) 帰り来る道に、弥生ばかりに、かへでの紅葉の
いとおもしろきを折りて、女のもとに道よりいひやる。

君がため手折れる枝は春ながらかくこそ秋の紅葉し
にけれ (下略) (第二十段)

(上略) とて、うつじてよみてやれりける。時は秋にな
むありける。

秋の夜は春日忘るるものなれや露に霧や千重まざる
らむ (下略) (第九十四段)

といった、いわば 前置型 が存在するその一方で、

(上略) この女、けしきを取りて、

名のみ立つしでの田長は今朝ぞ鳴くいほりあまたと
うとまれぬれば

時は五月になむありける。 (下略) (第四十三段)

(上略) この馬の頭、心もとながりて、

枕とて草引き結ぶこともせじ秋の夜とだに頼まれな
く

とよみける。時は弥生のつこもりなりけり。 (下略)

(第八十三段)

のごとき、後置型 も確実に認められるという点である。

第四十五段の「時は水無月のつこもり、いと暑きころほひに」
の「に」は、格助詞ではなく、いわゆる断定の助動詞「なり」

の連用形と考えるのが適切であり、同語をかりに終止形に変
更してみると、このあたりの本文は、

(上略) つれづれとこもりをりけり。

暮れがたき夏の日暮らしながむればそのこととなく
ものぞかなしき

時は水無月のつこもり、いと暑きころほひなり。 (下略)

と仮想できるのであって、これを 後置型 の一例と見なす
ことに何ら支障はないといえよう。第四十五段の場合は、つ

づく「宵はあそびをりて」云々への接続を迫られたために、

「なり」は連用形「に」をとったに過ぎないのだ。仮定の話
だが、もしもここで章段が閉じられていたとすれば、おそら

く、「なり」の下には「けり」が接続していたことである。

そして、もうひとつは、本稿の想定した 原形 同様、直
前の地の文がそこで終止し、文脈として歌にまで関わってゆ

かないケースも、以下のごとく作中希ではないという点であ
る。

(上略) 見れば、率て来し女もなし。足摺りをして泣け
どもかひなし。

白玉か何ぞと人の問ひし時露とこたへて消えなまし

ものを (下略) (第六段)

(上略) 富士の山を見れば、五月のつこもりに、雪いと

白う降り。

時知らぬ山は富士の嶺いつとてか鹿の子まだらに雪の降るらむ (下略) (第九段再掲)

(上略)といひてながめをり。

人はいさ思ひやすらむ玉鬢面影にのみいとど見えず (下略) (第二十一段)

昔、いやしからぬ男、われよりはまさりたる人を思ひかけて、年経ける。

人知れずわれ恋ひ死なばあぢきなくいつれの神になき名負ほせむ (第八十九段)

昔、帝、住吉に行幸し給ひけり。

われ見てもひさしくなりぬ住吉の岸の姫松幾世経ぬらむ (下略) (第一百十七段)

以上の二点に鑑みるに、前節で提示した第四十五段の原形は、形態上ごく自然なものとして受け容れられることになるのではあるまいか。

四

ところで、片桐洋一氏は、その著書『鑑賞日本古典文学第5巻 伊勢物語・大和物語』(角川書店・昭五〇)の中で、

「暮れがたき」の歌の位置」について、次のように述べていて興味をそそられる。やや長くなるが、この際関係箇所全文を省略せずに引用する。

堀辰雄は「暮れがたき」の歌を数日経ってからの作としているが、どちらにしても落ち着きが悪い。略本系の本文はこれを合理化して次のように二つの章段に分けている。

昔、宮仕へしける男、すずるなるけがらひにあひて家にこもりぬたりけり。時は水無月のつこもりなり。夕暮に風すずしく吹く。螢などどびちがふをまほり臥せりて、

ゆく螢雲の上までいぬべくは秋風吹くと雁につげこせ

昔、すきものの心ばへありあてやかなりける人の娘のかしづくを、いかでものいはむと思ふ男ありけり。心弱く、言ひ出でむことや難かりけむ、物病みになりて死ぬべき時、かくこそ思ひしかと言ふに、親聞きつけたりけり。まだひきたるほどに、死ににければ、家にこもりて、つれづれとながめて、

暮れがたき夏の日ぐらしながむればその事となくものぞかなしき

これを見ると、一見、合理的になつたように見えるが、
そうではない。後のほうで、「いかでものいはむ」が男
のこととなり、この文脈だと「心弱く、言ひ出でむこと
や難かりけむ」も男のことになり、さつぱり筋が通らな
い。無理に筋を通して読むと情趣が全くなくなる。しか
し、普通本の形でも、堀辰雄のように、数日経つてから
の作となり、『伊勢物語』の書き方としてはおもしろい
で、「……死ににければ、つれづれとこもりをりけり」
と「時は六月のつごもり」の間に歌を入れたい気持ち
はするが、実際にそつなつてゐる本を見るとこのようにむ
しろ反発せざるを得ない。やはり普通の本のまゝに読ん
でおくほかはないのである。(一一七頁)

ここでの「……死ににければ、つれづれとこもりをりけ
り」と「時は六月のつごもり」の間に歌を入れたい気持ち
はする」との発言は、小論にとつてたいへん心強い。片桐氏の
見解は結局百二十五段本現存形本文の容認に落ち着くのであ
るが、その理由は、ひとえに塗籠本本文のあり方に対する
「反発」にあつたと理解してよからう。たしかに、塗籠本第
四十四段冒頭の一文は不文ともいふべく、「さつぱり筋が通
らず」「無理に筋を通して読むと情趣が全くなくなる」と非
難されても致し方ないほどに拙い。しかし、目を向ける対象

を本稿が提案した本段の 原形 に入れ替えてみるならば、
はたしてその結論はどう変化するであろうか。少なくとも、
氏が「むしろ反発せざるを得ない」と感じた根拠は失われる
ことになりはしないかと思うのだが、いかが。

そして、さらにおもしろい現象がある。それは、宮内庁
書陵部蔵伝肖柏筆本の当該章段が、実際に、

昔男有けり人のむすめのかしつこいかてこのおとこに物
いはむとおもひけり心よはくうちいてん事かたくやあり
けむものやみになりてしぬへき時にかくこそ思しかとい
ひけるをやお聞つけてなく々々つけたりければまとひき
たりけりされとしにければつれ々々ともりおりけりさ
てなむよめる

暮かたき夏の日くらしなむれはそのこと々々なくな
みたおちけり

時はみな月のつごもりいとあつきころほひによぬにはあ
そひをりて夜ふけてや々涼しき風吹けりほたるたかうと
ひあかるこの男見ふせりて

ゆくほたる雲のうへまでいぬへくは秋風ふくとかり
につけこせ

という形態をとつてゐることだ。知る人ぞ知るこの本文は、
驚くほど私案に似ている。が、肖柏本が奇跡的に原形を保持

していたということでは、もちろんない。問題の歌の結句をわざわざ「なみたおちけり」に変更し、かつ、「こもりありけり」の下に「さてなむよめる」を補うといった姑息手術の形跡からして、これは、肖柏本（あるいはその祖本）書写校訂者の意図的な変更の結果であること明らかなのだが、そのかみ、私と同じような考えを抱いた人物がいたという事実には感動すら覚えすにはいられない。

五

地方へ下った親友との交情を描く、第四十六段。

昔、男、いとつるはしき友ありけり。片時さらずあひ思ひけるを、人の国へ行きけるを、いとあはれと思ひて別れにけり。月日経ておこせたる文に、「あさましく、対面せで、月日の経にけること。忘れやし給ひにけむと、いたく思ひわびてなむ侍る。世の中の人の心は、目離るれば、忘れぬべきものにこそあめれ」といへりければ、よみてやる。

目離るともおもほえなくに忘らるる時しなれば面影に立つ

奇しくもというべきか、第四十五段の直後に配置されたこ

の章段の傍線部本文が、元来親友が男に詠み贈った和歌——歌の原形をどう見定めるかはしばらく措くとして——であつたとする見方に、今や何人も異議を差し挟むことはできないだろう。『伊勢物語』といえども、その本文は、時としてかくも変成してしまふものなのだ。

だから、というわけではないが、小論の提起した第四十五段の原形に関する臆説についても、その可能性は十分あるものと考えている。もとより、どこにも証拠のない話だとしても、である。

注

注1 「伊勢物語など——いかに古典を読むかとの問に答えて」。引用は、新潮文庫『大和路・信濃路』に拠る。

注2 以下、『伊勢物語』（天福本）の本文は、小林茂美校注『影印校注古典叢書6 伊勢物語』（新典社、昭五〇）の学習院大学蔵本影印に拠るが、引用に際しては、表記を歴史的仮名遣いに改めたほか、適宜漢字を当て、濁点・句読点を施した。

注3 たとえば、「小さくまとまつた章段である」第四十五段を塗籠本が「わざわざ二分して変造する理由があるだろうか」との疑義を呈し、「天福本本文の形が大体諸本のとるものであり、そこで塗籠本は後撰を参看して二段に分断した、というものを根拠に乏しく、逆に塗籠本の如く二段になっているものを、他本では一段にまとめたため、二首併記の形をとる、とも言えるのである」と述べる、福井貞助『伊勢物語生成論「増補

版」(パルトス社、昭六〇・一三九―一四〇頁)や、「定家本の物語の展開の順序と塗籠本の章段の配列が逆であるという形態的側面」の問題と塗籠本の文意不明瞭さを理由に、「塗籠本が定家本を二章段に分化して合理化をすすめた」と解するよりも、定家本が塗籠本の二つの章段に内在する問題点を止揚して、詩情豊かな四十五段の物語として発展的に統一したものと解すべきではないかと思われるのである。もしもこれが定家本から塗籠本的形態に分化させたものであるとしたら、その作者はまことに稚拙極まる変奏曲を奏でたことになる」とする、市原憲『伊勢物語生成序説』(明治書院、昭五二・六六―六九頁)など、逆の見方もあるのだが、従えない。

注4

関根賢司『伊勢物語論 異化/脱構築』(おうふう、平一七)は、「ゆく螢」「歌の「螢」と「雁」との記憶、残像に従って」「晝れがたき」「歌を読み返してみると、そこに「ひぐらし」すなわち「蝸」の語が浮上し、ついで「かなしき」から「鳴」そうして/あるいは「雉」(中略)の語が浮上してくる、という仕組み」を指摘し、「一見したところ何の脈絡もないかのようにならべている二首の歌が、それぞれ、螢と雁、蝸と鳴・雉という景物、飛ぶ存在によって対応しているという構図」を見て取るが(一六一―一六二頁)、いかにも苦しい。

注5

以上両書の引用は、竹岡正夫『伊勢物語全評釈 古注釈十一種集成』(右文書院、昭六二)に拠る。

注6

引用は、宮内庁書陵部蔵本(函号五〇二一六七)の紙焼き写真版による。

注7

片桐洋一『伊勢物語の研究「研究篇」』(明治書院、昭四三)は、「これを伝肖柏本、あるいはその書本乃至は祖本における改変・改竄と見ること出来ないではない。しかし、右に掲

注8

げた文章を見ると、定家本の「うちいでむことかたくやありけむ」が「心よはくうちいでん事かたくやありけむ」になっている。これは前掲のごとく伝本系や塗籠本など非定家本系に見られた特色である。また「晝れがたき」の歌の第五句「物ぞかなしき」が伝肖柏筆本では「なみだおちけり」に変わっている。これは現存諸本には全く見られぬ独自異文であるが、伝肖柏筆本の改竄とすれば何のための改竄かわからない。やはり、かような本文を持った、かような形の本がかなり古くから伝わっていたと考えるべきではあるまいか」と述べ、その根拠を、伝肖柏筆本が「書写者の改変とは考えられぬ、かなり古い、いわば由緒のある異文を含んでいる」点に求めている(四〇〇頁)。かりにそうであったとしても、「かなり古い形態と原形とが別物であることはいうまでもない。

迫徹朗「歌のゆくえ——伊勢物語四十六段をめぐって——」(「尚綱大学研究紀要」第十七号、平六・二)、妹尾好信「世の中の人の心は目かれば……」(「追考——伊勢物語 第四六段贈答歌の痕跡——」(「古代中世国文学」第七号、平七・八)参照。

(こと) やすふみ・北海道大学大学院教授